

秋まき小麦の起生期～幼穂形成期追肥について

1 秋まき小麦の越冬状況

適期には種されたほ場での越冬前茎数は、平年並の茎数となっていました。そのため、起生期茎数は、1,500本/m²前後と予想されます。

「ゆめちから」の生育も同様と考えられます。

一方、遅まきとなってしまったほ場など、起生期茎数が少ないほ場では、下表を目安に追肥を行いましょう。また、本年は土壤凍結が深いことから融雪水の停滞が懸念されます。そのような場所では排水対策（溝切り）を行い、早期にほ場を乾燥させるようにしまししょう。根の浮上がりによる生育停滞を防ぐため、融雪後、畑に入れる状況になり次第、鎮圧ローラーを掛けましょう。

表1 R3年産秋まき小麦の越冬前生育状況（きたほなみ）

	帯広市		芽室町		中札内村		更別村	
	葉数 (枚)	茎数 (本/m ²)						
越冬前	4.9	942	5.7	1,102	5.3	1,080	5.1	944
平年値	4.8	768	5.4	1,090	5.1	957	5.3	988
越冬後茎数 (5ヶ年平均)	1,201		1,394		1,682		1,435	

2 秋まき小麦の起生期～幼茎期追肥の目安

適正穂数にターゲットを合わせた管理を

「きたほなみ」では起生期茎数1,000本/m²以上の場合、追肥なし（地力が低いほ場の場合は窒素量で2kg/10aを追肥）との指針があります。（北海道施肥ガイド2020）

また「ゆめちから」においても**極端な茎数過多では倒伏発生が懸念される**ことから、追肥量を抑えましょう。

判断が難しい場合には、普及センターまでお問い合わせください。

▲起生期窒素分肥の目安▲

小麦ほ場の状態	窒素施用量	施用時期
①茎数が目標の範囲となっているほ場 (茎数1,000本/m ² 以上)	0～4 kg/10a	○融雪後、ほ場に作業機が入れる状態になり次第、実施する。
②茎数が目標に達していないほ場 (茎数1,000本/m ² 以下)	4～6 kg/10a	○過繁茂となりやすいほ場では施用量を減じる。

▲幼穂形成期窒素分肥の目安▲

小麦ほ場の状態	窒素施用量	施用時期
①茎数が目標の範囲となっているほ場 (茎数2,000本/m ² 以上)	分肥を 控える	○5月上旬頃。 起生期～幼穂形成期の分肥
②茎数が目標に達していないほ場 (茎数2,000本/m ² 前後以下)	2～4 kg/10a	窒素量の合計は8kg/10a以内とする。 ○ゆめちからは施用を控える